

---

---

# 長期化するコロナ禍の学生への影響

岩田 一正

---

---

## はじめに

2020年2月初めからの新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行、コロナ禍によって、我々は空前の学校生活を経験しつつある。大学に目を向ければ、学生たちの研究や学習、教育実習の準備、そして実際の教育実習は従来とは大きく異なったものとなっている。また、彼ら／彼女らの大学以外の生活（家族や友人との関係、アルバイト、趣味など）も、以前とは大きく変容したものとなっている。

さらに、小学校や中学校におけるGIGAスクール構想の前倒しに見られるように、学校現場では端末や通信環境といったICTの整備が飛躍的に進み、コロナ禍以前とは異なった教育・学習環境が生まれつつある。学校以外に目を転じて、テレワーク、リモート・ワークが急速に浸透したり、ネット通販や食事の宅配サービスの利用が急増したりと、新しい生活様式が広がりつつある。

さまざまな場、面におけるコロナ禍を契機とした変化の過程が約2年間継続するなかで、それらの諸変化によってもたらされた新しい教育・学習環境や新しい生活様式がいつの間にか自明視される状況となっている。

事実、教室では、子どもたちがPCやタブレットを取り出して学習する姿を頻繁に見かけるようになっていくし、日常生活では、何も考えることなく外出時にマスクを装着するようになり、電車やバスにおいてできるだけ間隔を空けて座ったり立ったりするようになり、自宅外での食事の際にはほとんど会話をしなくなっているが、我々はこれらのことに違和感を抱かなくなってしまう。

今後、with コロナとなっていくのか、after コロナとなっていくのかを見通すことはできないが、前述したような諸変化を経ることで我々の生活が以前とは異なったものとなることは確実なことであろう。

しかし、コロナ禍を契機とした諸変化が人々に同一の影響を与えるわけではなく、一人ひとりが生活を営む個別具体的な状況に応じて影響は異なったものとなる。当然のことながら、大学生にもこのことは妥当するが、彼ら／彼女らの声を聴く機会はそれほど多くはないため、コロナ禍が引き起こした諸変化が彼ら／彼女らにどのような影響を及ぼしているのかを、我々は十分に認識することができていない状況にある。

そこで、本学教職課程では昨年度に引き続き、教職実践演習（中・高）の受講生に、次に示す課題でコロナ禍に関するレポート（1,200字以上）を執筆してもらうこととした。

以下の三つの課題から一つを選択し、以前とは異なる（と思われる）2020～21年の自身の経験について、どのような点が異なっている（と思われる）のか、そして2020～21年の経験を自分はどのように考えたり、感じたりしたのかを記しなさい。

a. コロナ禍と教育実習

b. コロナ禍と大学生活（学習、部活動、サークルなど）

c. コロナ禍と学生生活（アルバイト、趣味、家族や友人との関係など、大学以外の場での事象を含む）

コロナ禍にあった、この約2年のあいだに我々に生じつつある変化を記述することは、記述する学生自身にとって、この期間の経験を省察するものとなるだけでなく、2020～21年における自分の、また同一年齢集団の大学における研究や学習、準備も含めた教育実習の経験、大学以外の領域も含む自分の生活を、将来的に想起する手掛かりを提供するものとなり得る。さらに、学生の記述したレポートを読む者にとって、2020～21年度の大学生の学生生活や教育実習の経験が果たしてどのようなものであったのかということを確認し、学ぶことができる貴重な史料となり得ることだろう。

以下では、第一節にaの課題について、第二節にbの課題について、第三節にcの課題について受講生たちが記したレポートを掲載している。いくつかのレポートを選んで掲載することよりも、一人ひとりに固有で多様な経験を掲載することに意義があると考え、全員の文章を掲載することとした。但し、課題を提示した際には、本紀要に掲載することを前提するものであることを伝え、匿名を希望する者、掲載を希望しない者は、その旨を申し出るように指示したので、匿名となっているレポート、掲載していないレポートも存在する。

岩田一正「コロナ禍における学生たちの学びと日常」（『成城大学教職課程研究紀要』第3号、2021年、45-86頁）に掲載されている昨年度のレポートと比較すると、匿名を希望する者が増えていることを指摘することができる。このことは、長期化するコロナ禍がもたらしている学生たちの個別具体的な精神的な揺れ動きの大きさを物語るものであろう。

また、昨年度はaの課題を選択したレポートが全体の半分ほどを占めたが、今年度はいずれの課題についても同じ程度の数となった。あるいは昨年度に実施された教育実習の経験が、先輩たちによって今年度の実習生たちに伝えられ、あるいは実習校がコロナ禍の実習に慣れ、教育実習が昨年度よりも大きな印象を受講生たちに与えなかったのかもしれないし、学生たちにとって教育実習以上に大学生活や学校生活の変容が大きな衝撃を与えたのかもしれない。

なお、教職実践演習（中・高）受講生の率直な思いを伝えるため、実習校名など固有名を匿名化したこと、また明らかな誤字脱字を修正したこと、さらに読みやすさを考慮して読点を補ったり、改行の加除を施したりした箇所があるが、それ以外には手を加えなかった。その結果、特定の語句に関する表記のブレなどが散見されるし、一部に失礼な表現があるかもしれないが、読者のご寛恕を乞いたい。

## 第一節 コロナ禍と教育実習

本節では、昨年度に引き続いてコロナ禍のなかで実施されることとなった教育実習が、受講生たちにとって一体どのような経験であったのか、どのような困難に遭遇し、どのように精神的な揺れ動きがあったのか、また教育実習から何を学ぶこととなったのか、教育実習にどのような意義があったのかを記したレポートを見ていくこととした。

## 1. コロナ禍と教育実習 経済学部経済学科 若井省吾

コロナ禍と教育実習について、コロナ禍以前の教育実習とどのような点で異なり、どのように乗り越えていったのかについて記述していきたい。

なぜコロナ禍と教育実習について記述をしていこうと考えたかという、いつまで続くかわからないコロナ禍という驚異に、これから教員として働いていきたいと考え、私たちと同じように教育実習を経験していく人々が、これまでとは違う教育業界で対応していかなければならず、その参考となれば良いと思ったからである。

私自身、2021年度の教育実習であったため、昨年度の教育実習を経験した方々から、「実習日が延期になった」や「オンラインで授業をした」というような話を聞いていた為、ある程度気持ち的に余裕があった。また、実習先の学校側も昨年度にコロナ禍を体験していたこともあり、そこまで緊急事態というわけでもなく実習まで進んでいくことができた。

大学の教育実習に関するガイダンスでも、「コロナ禍で何が起こるかわからないから早めの対策を」と何度も言われていた為、余裕をもって準備することができていた。

しかし、実際の教育実習ではコロナ禍特有の難点がいくつかあった。

まず特に厳しいと感じたのは、「黙食」である。私の実習校は一学年に35人ほど生徒がいるような学校であった為、給食を食べる際、全員前を向いて給食の時間中一切話してはならず、先生たちも自分たちの机で一言も声を発さずに食べなければならなかった。本来給食は班を作って、みんなで仲良く食事をする生徒たちにとって、友人と交友する大切な時間である。また、教育実習を経験した先輩方が、「給食中に生徒たちと仲良くなった」「給食の時間いろいろな班に移動して子どもたちと話していた」とおっしゃっており、生徒たちとの関係を築いていく上で給食の時間の大切さというものは、よく聞いていた。

しかし、実際は先ほど書いたような状況であった為、給食の時間に生徒たちとの仲を深めたり、信頼関係を築いたりすることは困難であった。対応策として実践していたことは、休み時間にはなるべく無理やりにも話しかけて子どもたちの輪に入っていくことであった。最終的には、とても仲良くなることができ、実習最終日には涙を流してくれる生徒もいた。

次に、常にマスクをしているため生徒たちの顔と名前がなかなか覚えられないことである。目元や体形だけで子どもたちを判別することが難しく、一学年に380人くらい在籍しているような大きな学校であったこともあり、生徒たちの名前と顔を覚えるための工夫が必要であった。常に名簿を携帯し、顔を見て話すことを心掛け、連絡帳のやり取りで生徒の性格や好みなどの情報を仕入れて徐々に覚えていくことにした。

最後に、指導教員の先生と、ともに実習をした実習生と慰労会を開けなかったことである。教育実習とは直接的に関係ない話ではあるが、人生の先輩でもある指導員の先生と一緒に教育実習を経験したほかの実習生と慰労会で語り合うことも大切なことだと私は思う。

以上の3点からもコロナ禍の教育実習は、以前よりも相当な苦戦を強いられる。しかし、困難を乗り越えたからこそ気づけたことや、知れたことが多くある。

コロナ禍で得た経験は、何事にも代えがたい財産となっているであろう。こうした経験を将来向き合うことであろう困難に役立てられたら良いと思う。

## 2. コロナ禍と教育実習 文芸学部国文学科学生

コロナ禍の教育実習とその前の教育実習との違いは、生徒との交流の機会の少なさだと思った。

私自身が高校生だった際、お昼休みや掃除の時間などを実習生と一緒に過ごし、実習生と距離を詰めていた。しかし、コロナ渦である現在の実習では、密を避けるために昼食は黙食に、掃除は分散下校の影響により、掃除の時間が作れず、教室の掃除は教師が行うことになっていた。そのため、生徒との交流する機会が少なかったように感じる。

このような環境下では、教壇実習の時間が生徒と関わるができる唯一の時間だった。

授業では1人対40人であるため、全ての生徒と会話することができなかった。特に、私たち実習生は授業を進めることに頭がいっぱいになってしまうため、生徒を授業内で知り、距離を詰めることは難しかった。私は中学校の実習だったため、発言することを恥ずかしく感じる生徒がおり、特定の生徒が発言し、その生徒とのみ会話するパターンが多かった。このようなコロナ渦の教育実習に参加した私は、やはり生徒との距離を詰めることができずに悩んでいた。実習中の前半は環境に慣れることや、授業準備に追われることが多く、この悩みを解消できずにいた。

しかし、実習の後半、余裕が生まれてきたとともに、せっかく実習に参加しているのだから、生徒と交流できないのはもったいないと感じた。

そこで私は自身が行う教壇実習の授業前、早めに教室に行き、短い10分休みを活用して生徒と交流することを心掛けた。その中でも、一人の生徒は持ち物が横浜ベイスターズのグッズで、私も野球場でアルバイトしていたことから、交流を図ると話が弾んだ。私が授業の最後の日に、その生徒から一緒に野球の話ができてうれしかったと声を掛けてもらった。

また、クラス日誌の教師からのコメント欄を用いて、交流を図った。例えば、ある有名人が結婚した話題など、生徒が食いつきそうな情報をチェックし、興味を惹かせた。日誌の影響なのか他の生徒たちも私に気軽に話しかけて良いと気づき始めたのか、自分たちの趣味や部活動の話などを積極的に話してくれる子が増えてきた。

ここで感じたのは、生徒たち自身も実習生という存在に慣れずにいて、またコロナ渦という環境により、交流できないことをもどかしく思っていたのだということだった。例年であれば、たくさんあった交流の機会により、距離を詰めることができたが、それがなかった。しかし、教師の工夫次第でそれは解消できると学んだ。

三週間はとても短い時間であるが、実習を終える時には、生徒たちから色紙をもらうなど、生徒の記憶に残ることができた。次年度に教育実習に参加する後輩たちにも、生徒と交流する機会の少なさに驚くだろう。しかし、それで諦めず、貴重な教育実習を楽しんでほしいと思う。コロナ渦の教育実習にもどかしく感じることも多かった。自身で工夫して一つでも多く学びを持ち帰って、将来教師になった時に生かせるような体験ができて良かった。

### 3. コロナ禍2年目の教育実習 文芸学部国文学科学生

私は、2021年5月の末から3週間、自分の母校である都立高校で実習を行った。

私には年子の姉がいるが、姉も他大学で教職課程を受講しており、例に漏れず教育実習に行っていた。しかし、姉が教育実習に行った2020年はコロナウイルスが急激に大流行した年であり、その中で例年通り5月や6月に教育実習を行うことは不可能であった。よって姉は予定より半年ほど後の10月末頃に教育実習を行っていた。

そのような姉を見ていた私は、自分の実習がどのような形でとり行われるのか全くもって見当がつかず、

不安に思っていた。四年に突入し実習先と連絡を取るようになって、実習の期間はあくまでも〈予定〉でしかなく、本当にその月に入るまで実習は確約されていなかった。実習日誌の表紙の「実習期間」に日付を入れられたのも実習が始まってからであった。コロナ禍2年目といえども、コロナウイルスは教育現場をそれほどまでに追い詰めているのだということを、教育実習に行く前から実感した。しかし、そんな予断を許さない状況下においても、当初の予定通り5月から3週間、私たち実習生を受け入れてくださった実習校には、心より感謝している。

実習に行く前、大学の授業では積極的にICTを用いた授業検討をしていた。私は正直にいうと機械系に弱く、苦手意識を抱いてしまっているのが、実習で遠隔授業を行ったりするかもしれないということに不安を感じていたが、私の母校に関してはICTの導入はほとんどなく、授業で使うとしても用意してきた画像や文章をスクリーンに写す程度であった。また、コロナ禍での授業の実態という点に関しても、遠隔授業などは行っていなかった。

実習は緊急事態宣言下であったので、学年ごとの分散登校が実施されてはいたが、登校していない日は自宅で自習することになっており、学校側から生徒へのアプローチは朝の数分のZOOM上での挨拶だけであった。実習後、大学の教職の友達と話を分かったことであるが、ICT導入の有無やその程度などは学校ごとに大きく異なっていた。コロナ禍において、学校現場にICTが大々的に導入されたと思っていたが、それは一部のみであり、現実的にはもっと時間がかかるものであることを知った。

コロナ禍における学校の生活は、私が経験してきた高校生活とまるで違っていた。一番驚いたのは、昼食の時間だ。一緒に食べることはできなかったのは言うまでもないが、昼休みに生徒の様子を見に教室に行くと、全員自分の席に座って黒板の方を向き、一言も言葉を交わさずに黙々と食べていた。昼食時の生徒たちに関して先生方からは何も聞かされていなかったのが、初めはすごく変だなと感じた。1年生だから慣れていなくてこんなに静かなのかなと思ったが、生徒に話しかけると、答える際には必ずマスクをしてから話すようにしていて、自分でも間抜けではあると思うがそこでやっと気がついた。コロナ禍での教育現場で、昼食までもそれほどまでに徹底されていることは衝撃であった。そして、それが生徒や学校では「通常」になっている事にも驚かされた。その頃の私は家族以外とは基本的に食事をしていなかったのが、食事時の感染予防の意識が低くなっていたのかもしれないが、そのような私と学校の中の生徒とでの差にも衝撃を受けた。

他にも、コロナ禍での実習で困ったことは、行事が中止や延期になったり、特異なケースで実施されたりしたこと。分散登校のせいで授業時数が変化し、指導教諭の授業を見学する事なく教壇実習が始まってしまったこと。分散登校や昼食時のルール等によって明らかに生徒との交流の機会が少ないこと。生徒が全員マスクをつけているので、顔の識別が難しいことと、授業中を含めてその表情や反応を得にくいこと、などがあった。ここに挙げたどれも悔しいことではあったが、全てにおいて「生徒との交流の機会の少なさ」に繋がってしまうことが最も残念であった。

逆に、そのような状況であるが故によかったこともあった。分散登校のおかげで、担当学年がない日＝持ち授業がない日は、本来なら見られないはずの他学年の先生の授業を自由に見学できたし、そんな日には指導教諭としっかりと話をすることもできた。生徒の提出物に目を通しコメントをつけることもできた。このように全てが全て悪いことばかりではなかったのも事実であった。

私の教育実習は、自分からしても、他の人から見ても特異な経験であったらと思う。制約の多い状況下で、経験できなかったことも沢山、同時に、経験できたことも、そこから気付けることも沢山あった。「通常」や「例年」からは外れているだろうが、多くのことを学べる実習であった事には変わらない。今後の教

育実習の実態が、どのように変化し、あるいは変化せずにいるかは全くもって分からないが、「教育実習」という学びの価値が変わることはないだろう。実習を控え、不安に感じたり残念に感じたりしている人がいればそのことだけは伝えられたらと思う。そう言い切れるほど、私の3週間の教育実習は有意義で、非常に貴重な経験であった。

#### 4. 誰にとっても試練の多かった、コロナ禍の教育実習 文芸学部英文学科 梅津翼

COVID-19 が世界的に大流行した2020年、日本の義務教育諸学校に加えて、高等学校においても全国的な休校措置が取られた。その結果、生徒は自宅学習や不慣れなオンライン学習で勉強時間の確保、学力の維持・向上が強えられる未曾有の事態となった。

2021年は、学校が再開されたものの、午前中は登校して対面授業を受け、午後は帰宅してオンライン授業を受けるという組み合わせで授業が実施されるなど、未だ例年のような学校生活には戻っていない。2020年と比較して、学校側も生徒側も多少は、例年とは異なる授業形態に慣れてきたとは言え、昇降口にサーモセンサーの設置や各教室の消毒作業といった普段とは異なる状況下で、生徒にとって学校にとって試練の多い中で私は教育実習を経験した。例年とは異なる教育実習について、私と生徒が経験した3つの試練を以下に記す。

1つ目の試練は「給食という名のリフレッシュタイムがない」ことである。生徒にとって給食は一日の授業を受ける上での楽しみの一つと言えるだろう。クラスメイトと会話を楽しみ、購買へ行って何を食べるか考えるなど各々が自由に昼休みを楽しみ、リフレッシュして午後の授業に臨む。

私の教育実習期間は、緊急事態宣言下で基本は午前授業のみで、木曜日だけは昼食を挟んで午後まで授業という変則的な時間割であった。しかし、木曜日でも教員による監督のもと黙食という形が取られており、授業間の気分転換になる給食の時間はなかった。生徒もクラスメイトと話しながらお互いのことを知る機会がなく、教育実習生の私にとってもHR担当クラスの生徒とコミュニケーションを取る給食の時間がなかったことは普段の教育実習とは異なり、生徒との仲を深める上で苦勞した。

2つ目の試練は「学校に行く楽しみの一つ、放課後のフリートークが出来ない」ことである。私が高校生だった時、毎日学校に行く楽しみの一つは、帰りのHR終了後から当時私が所属していた野球部の練習開始までの放課後の20分程度、自由に友達と話すことであった。今の高校生の中にも放課後に友達と話すことを楽しみにしていた生徒は多くいるはずである。

私の教育実習期間は、帰りのHRが終わると生徒は教員に直ぐに帰るように追出されており、職員室で何回か追出しを聞かずに中々帰らない生徒がいるといった問題があげられていた。学校に来る、授業を受ける、コロナ禍で生きる上で対話という楽しみが制限されることは生徒にとって辛いことである。その中でも彼らは現状を把握し、朝少し早く来たり、授業間の休み時間やSHR後の短時間を上手く活用したりして、クラスメイトとの会話を楽しんでいた。

教育実習生の私もそれらの時間を使ってHR担当クラスや担当学年の生徒とコミュニケーションを取ることになっていた。最終日に頂いた色紙には、「先生と話すことを楽しみに学校に来ていた」や「先生と少しでも多く話すために朝早く来ていた」とのコメントもあり、過渡期だからこそ一層の柔軟な対応力や対話の貴重さを実感した。

3つ目の試練は「クラスメイトと仲を深める学校行事が満足に出来ない」ことである。私が教育実習を行った6月には例年体育祭が実施されていた。しかし、2020年は実施されず、2021年はマスク着用厳守で合同

体育という形で、学年毎に綱引き、ドッジボール、全員リレーが三日間かけて行われた。

感染状況や学校の様々な事情で、そうした形で実施することも叶わなかった学校もあり、その中で合同体育という形で実施し、その後クラスターが発生することもなく安全に終わることができ、幸運であったと思う。一年生はひとまず高校入学後初めての行事が出来たことに満足していたが、彼らの表情からはもっと自由にワイワイと盛り上がりたかったという気持ちもあったと推察する。

以上のような状況下での教育実習の経験は、大変貴重なものであった。2022年からの学校教育が如何に変化するかは予測困難であるが、学校、教師、そして生徒一人ひとりが何が重要かを判断し、新たな学校教育への一歩を踏み出しているように感じた。

## 5. 大学最後の春から夏 文芸学部英文学科 黒越梨奈

大学4年生になった春から学生生活最後の夏までは私にとって本当にいろんなことがあった時期だった。教職志望の私にとって最大の山場とも言えた数か月について教育実習を中心に、教員採用試験にも触れながら記していきたい。

大学3年生の一年間で、コロナ禍によるオンライン授業や制限のある生活様式には少し慣れたと思っていたが、6月の教育実習が迫るにつれて不安は大きくなるばかりだった。3年生の授業から積み重ねるはずだった実習のための準備は対面では一度もできず、模擬授業は自宅で10分程度の動画を撮影し提出するというものだった。4年生になったら対面でもたくさん練習できるだろうと期待しつつ、学年が上がるまでの春休みは教員採用試験の準備に時間を割いた。

4月になり大学最後の一年は対面で授業ができるとわかって一安心したのも一瞬で、実際に前期で通学できたのは最初の1・2週間だけだった。具体的に教育実習の日程が決まり、結局オンライン授業になってしまっただけからは不安ばかり膨れ上がり、自分を保ってやるべきことをやるだけで精一杯だった。対面での模擬授業は一人10分のもので一度行った限りで、教科書に沿って授業を計画準備し実際の流れで行う模擬授業は結局一度もできなかった。授業の指導案作成も大学の授業では扱われず、本やインターネットから自分で調べた情報だけをもって実習に臨むことになった。

今思うと、教育実習についてインターネットで多くを調べたことはあまり良くなかった。何通りもある指導案から正解を見つけようとして焦ってしまうことに加え、多くの人の経験談は余計な緊張や不安を煽るだけだった。緊張感を持って臨むことは大事だが、過剰な恐怖心を持ってしまうことはいいことではない。

教育実習直前、ただでさえ準備が満足にできていない状態のときに緊急事態宣言が発令され、教育実習は宣言下での実施となった。そんなときに実習生が学校にお邪魔してもいいのかという思いと、模擬授業の経験もなく指導案も書いたことがない状態で実習初日を迎えてしまう不安で、正直おかしくなりそうだった。

一方で、ここまできたらやるしかないという気持ちもあり、教育実習に臨む覚悟を決めた。教壇実習に向けての準備は教科書を読み込むことくらいしかできておらず、ほとんどぶっつけ本番の状態だったので自信などあるはずなかった。その中で自分にできることは何かと考え、私は実習中どのように過ごすかについていくつか決めごとをした。①絶対に疲れを見せず誰よりもハツラツとエネルギーで溢れている学生らしい若さのある姿勢でいること、②学びたいという意欲を欠かさず全てをスポンジのように吸収すること、③教壇実習で声の大きさや明瞭さに関する指摘だけはされないように自信が無くても堂々とはっきり聞き取りやすい声で話すこと、④感謝を忘れないこと、⑤楽しむこと、私に考えられたのはこのくらいだった。

6月、教育実習が始まると、それまでの不安が嘘のように楽しくて仕方がなかった。本当に指導教諭をは

じめとした先生方や生徒、環境に恵まれた。自分の力不足や悔しさは数えきれないほど感じたが、授業準備が大変でも楽しいという気持ちが勝った。実際に教壇に立たせて頂けるだけでなく、たくさんの先生方の様々な授業を見学できる機会など二度とないと感じ、あまりに貴重な経験にある種の興奮状態だったように思う。

中高一貫校で実習させて頂いたため、中学1年生から高校3年生までの6学年全てで授業見学をさせて頂き、担当教科の英語だけでなく古典・歴史・数学・理科など教壇実習の時間以外ほとんどを見学に費やした。ここで学べたことの多さははかり知れない。準備段階で十分にできなかったことも、すべてを実習で学んだ。

なによりも大きかったことは、教員になりたいという気持ちが実習前とは比にならないほど強く確かなものになったことだ。最後まで自分の授業には課題が残り、完全な自信を持てたわけではなかったが、とにかく教員になりたい、実習が終わってほしくないという思いが強くなった。私がこのように思えたことも、課題や悔しさはたくさん持ちながらも後悔は全く無い教育実習にできたことも、すべて実習校と指導教諭、生徒や多くの先生方に恵まれたからであり、感謝の気持ちは今でも変わらず持っている。

最初はどうなるかと不安で仕方なかった教育実習が終わって3週間後が、教員採用試験の一次試験だった。実習で教員志望が明確になったため、集中力を切らさず試験対策に切り替えられた。続く二次試験と実技試験が夏終わりまであり、始終コロナの爆発的な勢いにビクビクしながらではあったものの、一緒に教員を目指す友人と毎日のようにzoomでつながり励まし合ったことで乗り越えられた。10月に結果が発表され、まさかの合格を知ったとき、怒涛の半年が終わったと気が抜けた。最初に教育実習の指導教諭とお世話になった先生方に報告した。良い報告ができてよかったと心底安心した。

私の大学生活最後の春から夏にかけての半年はきっとこの先も忘れない時期だった。今まで感じたことのない感情が多くて新しいことの連続だった。教育実習がなにより大きいターニングポイントだったように思う。大変な状況の中でも実習に臨ませてくださった環境とたくさんの先生方へ感謝の気持ちでいっぱいだ。

## 6. コロナ禍における教育実習で経験したことについて 文芸学部英文学科学生

コロナ禍の教育実習は、従来の教育実習と比べると、注意を払わなければならない場面や手のかかる仕事が増えてしまったように思われる。これは、教育実習を体験する学生だけではなく、教育実習を引き受けてくださる学校や学校の先生、生徒も同様である。

今までであれば、生徒と教師同士でコミュニケーションをする時に、何も気にすることなく普通に会話することができた。しかし、感染症の影響により、お互いの距離感やマスクの着用などに気を使う必要が生じてしまった。例えば、授業中はマスクをしているため話しづらく、時々、生徒も話しづらそうな様子であった。そのため、お互いに以前よりも大きな声で発言しなくてはならなくなった。私自身も、マスクをしながらより大きな声で話さなければいけないことがここまで慣れないことだとは、教壇に経つまでは実感できなかった。

コロナ禍の影響は、授業や日常生活の様々な場面で現れた。例えば、グループワークやペアワークの実践も非常に大変であった。アクティブラーニングが重要視されている中、生徒同士に直接的にコミュニケーションをさせることできないのは、非常に悩ましい。

その他にも、給食の時間や掃除の時間も気を引き締めて生徒に指導する必要があった。休み時間は、常に目を離すことができなかった。中学校の生徒は、休み時間になると取っ組み合いをしたり、くっ付いたりすることも多いので、こうした時なるべく距離を空けるように指導する必要があったからだ。こういった指導は、自分を含め学校の先生も、指導するには少し胸が痛いと言っていた。



また、少しでも発熱の症状の生徒がいたり具合の悪い生徒がいると、学校でコロナの集団発生が起きてしまうのではないかという心配事もある。もしもコロナに感染した生徒がいた場合は、多くの生徒や教師が濃厚接触になりクラスターが発生してしまう。そうなれば、学校が臨時休校になる可能性もある。教育実習で私は、学校がいかに健康問題にデリケートに取り組まなければならないのかを実感した。そして、3週間の僅かな期間だけでも、感染症対策がいかに大変であるかを実感した。

ただ、感染症対策は本当に入念に行われているように感じた。アルコール消毒や検温、毎日の健康観察カードのチェックなどが毎日行われていた。このおかげで、生徒たちは安心して学校で生活することができるのだと思う。教師にとっても生徒にとっても大変なことの繰り返しであることは間違いないが、この新しい生活スタイルを共に受け入れて、前向きに学校生活を送ろうとする意識がとても大切なのだと思う。

授業スタイルも、これからさらにニューノーマルになっていくように感じた。アクティブラーニングに関しても、直接的なコミュニケーションだけではなく、ICTを活用した活動も取り組まれている。感染症の中であっても、その中でできる最善のことを見つけていくのが現状の課題である。そのためには、成功と失敗の繰り返しなのかもしれない。

これまでの学校はもう二度と戻ってこないかもしれないが、生徒が安心して学校で生活するためには教師はどういった感染症対策を行い、どのように授業を工夫・改善するかを常に考えていく必要があると私は思う。

## 7. コロナ禍における教育実習を経験して 文芸学部ヨーロッパ文化学科 高橋紀久子

コロナ禍における教育実習は、従来と違う形態であったが、私にとっては実り多き時間となった。

私は担当した科目がフランス語と特殊であったため、母校ではない学校で実習を行わせてもらった。出身校ではない緊張や不安もあったが、そのぶん却って新鮮な気持ちで、気を引き締めて取り組むことが出来た気がする。そこでは、高校2年で5時間、高校3年で5時間の計10時間の教壇実習を任せて頂いた。

そして、コロナ禍の影響下にある中で、実際に自分が授業をしてみて大変だと感じたことが2つある。1つ目は、教師がマスクを着用したまま授業をしなければならないことである。自分ではいつもより大きな声で話しているつもりでも、生徒にはよく聞こえていなかったということがあり、この点は指導教諭に指摘頂いた。この出来事から、生徒にはっきり聞こえるようにするためには、教師は声を張り上げるように話をしなければいけないことがよく分かった。

2つ目は、従来なら50分ある授業が45分に短縮されていたことである。この5分は生徒にとっては大して変わりのないものを感じるかもしれないが、教員にとっては指導案に変化が出るほど、影響力の大きいものなのだ。私も授業をしていて、45分授業というのは時間が経つのが早すぎて、正直指導案で予定していたことの半分も終わらないときもあった。

しかし、教壇実習を自分が納得する形で進めることが出来たのは、教育実習が始まる前までに、教える範囲の指導案と補足のプリントを全て作成して、指導教諭の承認を得ておいたからだと感じている。

私の場合は、実習が始まる1ヶ月前から担当する箇所の確認と指導案の準備に取り掛かっていた。このようにすれば、実習が始まった後でも授業のシミュレーションができ、指導案を何度も修正し、追加の問題プリントなどを作る時間も確保出来るからだ。そして、私は1人ひとりの生徒と目を合わせることを意識しながら、授業をするようにしていた。この甲斐もあって、生徒の方からたくさん質問をしてくれるようになった。

さらに、教壇実習の延長線上のものとして、放課後に高校3年生の生徒と一緒にフランス語の検定試験の勉強をしたりもした。私自身が受けた際にとくに重要だと思った文法事項を強調して復習したりするなど、1対1で個別指導を行う力も養われたように感じる。

その他にも、学級担当として入った高校2年生のクラスでは、ホームルームの時間を使って、身近な日本語になっているフランス語を紹介するという機会を用意して頂いた。ここでは、黒板にフランス語の単語を書き、綴りから日本語の意味を推測してもらうというクイズ形式で進めていった。生徒は初めて見る綴りを難しく感じるのではないかと最初は思っていたが、意外とすぐに意味を答えてくれたため、私も驚きを感じた。この機会を通して、生徒と交流を深めることが出来てとても嬉しく思う。

コロナ禍における緊急事態宣言が発令されている中での実習ということで、予定されていた体育祭が延期されたり、生徒と昼食の時間を共にすることが出来なかつたりしたのは残念であるが、何よりもこのような状況下にあっても受け入れて下さった実習先の学校や先生方に対しては、大変感謝の気持ちでいっぱいである。もし私が今後教員になる機会があるとしたら、今回の教育実習の経験をしっかりと活かすことが出来るようにしたいと思う。

## 8. コロナ禍と教育実習 法学部法律学科 青木正太郎

コロナ禍での教育実習について述べる。教育実習においては、とにかく準備段階での見通しが全くつかないことが非常に多かった。実習のお願いをしたのは2020年の12月で、既にコロナ禍にあった。その時点では受け入れてもらえる次第の返事を頂いたのであるが、流行の度合いで実習ができるかどうかとも危ういことが伝えられた。私の受け入れ校は長野市にある県立高校であり、当時の長野市の状況は予断を許さなかった。1日に20人近くの新規感染者が報告される程で、レベル4相当である。長野市においても非常に高い緊張感を持っていた。

また、何より私が東京都から戻る、ということも不安の種であった。もし教育実習が実施されたとしても、県外からの実習生を受け入れないということも十分に考えられたからである。しかも、当時の東京都の感染状況を鑑みれば、受け入れてもらえない可能性もある、という不安が大きかった。

次に実習校と連絡を取ったのは、2021年の4月である。受け入れの確定以来、何の音沙汰もなく、これも不安であったのだが、無事に実習ができる運びとなった。この頃は、長野市の感染状況は落ち着き始めていた。しかし松本市の高校などを始め、校内のクラスター感染が県内で起こっていたため、地域の感染対策をよく確認することになった。

松本市の場合は、2週間前に現地で状況観察をすることになっていたが、長野県教育委員会の内容ではそこまで厳しくはなかった。混乱する中、同じく東京の大学から実習を受ける高校の同期と連絡を取り、対策の詳細を確認していった。その同期はPCR検査を受け、私の場合は2週間前に現地入りをしている。

実習の1週間前に、指導教諭と対面で打ち合わせを行った。担当クラス、予定時間、範囲などを確認し、使用教科書・資料集を貸して頂いた。この際、実習をする上での注意点を質問した所、特段の制限は一切なかった。例えば、出勤の際の体温測定も不要であったし、授業中に机を向かい合わせにするグループワークも問題がないとされた。

いざ実習が始まり、実習校としての感染対策について、管理職から説明を改めて受けた。夜間の会食や不要な接触を避けることが求められた。更にクラスター感染に対する注意も促された。実習生同士、厳守し無事に実習を終えられた。

また、以前は実習生と担任で飲み会を実施していたそうであるが、卒業時の担任がまだ在任中であり、中止されている。とはいえ、先生方の計らいで学校の会議室で、近況報告会が開かれた。

高校生については、私の頃には昼食後にあったHRが朝に変更され、担任に当日の体温測定の結果を提出し、昼食は黙食となった。また掃除の際に、机の天板のアルコール消毒を行うことが指示された。部活でも、活動の是非に関わる重要事項であると再三の注意を顧問から行っていた。

私の場合、教育実習におけるコロナ禍の影響は比較的少なかったように思う。暗中模索しているような事前準備の段階と打って変わって、実習が始まると、ほとんど杞憂であった。実習生同士の校外での飲食が無いように注意喚起がされていたが、実習中には余裕はなく、現実的ではないため、さほど大きく変わった点とは考えられない。感想としては、意外と何とかなったという所である。

## 第二節 コロナ禍と大学生活

本節では、学習、部活動、サークルなどを含む大学生活に焦点を合わせ、受講生の学習者としての側面にコロナ禍がどのような影響を及ぼしているのか、コロナ禍によって彼ら／彼女らの大学生活がどのように変容したのかということを経験したレポートを見ていくこととしたい。

### 1. コロナ禍と大学生活 経済学部経済学科 小谷野凌也

2020～2021年の経験を経て感じたこととして、特に大学での学習面についてまとめていく。

新型コロナの感染拡大により、大学での授業はオンラインでの学びとなった。これまで様々な講義を受けてきて、コロナ禍以前の学習形態と異なる点についてまずまとめると、①オンデマンド配信、②当日に掲載される講義資料、③zoomでの講義など多様な形で行われた。

まず、①では、事前に録画された動画を添付された資料を見ながら各単元を学習していくものであり、特にこの形式の特徴として、それぞれが受けたい時間で受けることができる。そして、わからない箇所があったときに何度も動画を見返すことができる点もある。

一方で、自宅にいる機会が増えたことで授業へのモチベーションの欠如や、やる気が起きないといったことから未視聴の講義動画がたまってしまおうといったことも考えられる。オンデマンド授業を受ける際は、計画的に視聴したり、隙間時間を利用したりと工夫しながら受講することが大切であると感じた。

②は、毎授業、添付された資料を読み、それに関する課題に取り組むことで理解を図っていく形式であり、これも、自身のペースで取り組むことができる点は特徴である。

ここで私の経験から、コロナ禍以前に履修していた科目で、私はその科目の単位を落としてしまい、再履修としてコロナ禍でこの形式になったときに感じたことを述べておく。

コロナ禍以前では、講義形式の授業で、宗教の歴史に関する膨大な量の知識や内容を90分聞いており、本時で何を学んだのか分からないことが多かった。一方、オンライン授業では先生の話はなく、資料だけの学びとなるが、課題で問われていることを中心に、資料を読み進めたり自分なりに調べたことをまとめたりすることで、今までよりも授業の内容を焦点化して学習することができたと感じた。一つの科目を二つの授業形態で学ぶ機会はないと思うが、オンライン授業と比較できた点は私自身印象深かった。

③は、自宅などの Wi-Fi 環境が整っているところで実際の授業と同じ時間に授業を行うものであり、特に通学の時間が削減できる点は感染症という観点からもとても便利であった。一方、画面越しや画面オフの状態を受講することが多いため、集中力が欠けやすくなり、先生の話聞いていない場面もあるなど効果的に zoom を活用できているのか感じることもあった。

このように、新型コロナの影響を受け、以前の学びと違う形式や環境で学習することになり、そこでの授業形態も様々なものとなった。受講するうえで大事なこととして、それぞれ違った形の授業を受ける中で、いかに効率よく、計画的に課題等をこなせるかが重要であると考えている。私は、対面の授業があり、通学時間がやや長かったため、その時間で課題に取り組んだり、自宅では就寝前に動画を見たりと、自身がやりたいときに取り組むよう意識してきた。そうすることで、退屈さや苦痛を感じることなくこなすことができるので、そうした工夫を大事にコロナ禍での学びを柔軟に対応していくことが大切であると感じた。

## 2. コロナ禍と大学生生活 経済学部経済学科 山中涼太郎

私は、学校は勉強をするところでもあり、日常を過ごす大切な場所でもあり、誰にとっても不都合のない場所でなければならないと考えています。大学でのキャンパスライフというものも、私の思い描いている学校像のような楽しい日常生活を送れるものだと思っていました。ゼミ等を通じて自分自身の専門分野を追究したり、部活動やサークル活動を通して友達との絆を深めたりと、様々な経験が出来るキャンパスライフに憧れを抱きながら、この成城大学に入学してきました。授業面では、新たな学習に好奇心を寄せ、多くの友達と助け合いながら学びを深めていったと心から言うことができます。また、部活動やサークル活動では、多くの先輩方や後輩と出会い、自分の趣味を謳歌できる夢のような毎日を過ごしていました。

しかし、2020年より COVID-19 が拡大し、100年に1度のパンデミックが発生してしまいました。COVID-19 の拡大は、これまでの学生生活の全てを奪い、我慢の毎日を強いました。

政府から緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が発令され、自粛やステイホームが叫ばれるようになると、大学生ならではのキャンパスライフは一気に制限されました。例えば、対面授業からオンライン授業へと移行がなされたり、部活動やサークル活動が禁止されたりと厳しく行動が制限されました。毎日パソコンに向かい、黙々とオンライン授業と課題をこなすだけの日々は寂しく、つまらないものでした。

また、オンライン授業では、淡々と一方通行で授業が進行するため、対面授業の時よりも気軽に質問をすることができなくなったと感じています。そのため、授業内容の理解が対面授業の時より難しく、課題に取り組むのに多くの時間を費やさなければならないことが多々ありました。思い返すと、課題に取り組むのに多くの時間が取られ、授業内容を復習する時間もほとんどなかったと感じます。本当に自分の知識・教養が深まっているのかということにも、疑問が残っている部分が多くあります。対面授業の時のように友達と助け合いながら学ぶことができなかつたため、授業を理解することが難しく、非常に辛い日々だったと感じています。

授業がオンライン化したことだけでなく、部活動やサークル活動が禁止されたことも日常をつまらないと感じるようになった原因の1つです。合宿に行ったり、学園祭に向けて部活の皆で協力して練習したりという楽しみがなくなってしまったことで、大学生であるという実感も徐々に薄れていきました。ですが、2021年になると、このような自粛生活にも明るい兆しが見え始めるようになりました。

2021年4月、徐々に感染症の流行が落ち着きを見せ、今までの日常も段々と戻っていきました。感染対策を徹底しての対面授業が開始されたり、部活動やサークル活動の規制が緩和されたりしました。私の中で

何より嬉しかったことは、友達と久しぶりに再会できたことです。「久しぶり!」「元気だった?」等の何気ない会話を友達としあえることがとても嬉しかったです。

最後になりますが、この私の文を読んでくださっている学生へ伝えたいことがあります。友達とは、楽しい時に笑い、辛いときは支えあい、どんな状況でも信頼できる心を許せる存在です。私は、この成城で今の友達と巡り合えたことは「奇跡」だと感じています。広い世界にこんなにもたくさんの人がいて、たくさんの学校がある中で自分を思いやってくれる友達と出会えたことは「奇跡」としか言いようがありません。是非、この成城でたくさんの友達と巡り合い、多くのことを学び、よく遊び、いろいろなことに挑戦しながら、1日1日を大切に過ごして行ってください。

### 3. コロナ禍で変化した大学生活 文芸学部国文学科学生

新型コロナウイルス感染症が流行して早くも2年経つが、この2年間で生活習慣は大きく変化し、今までの日常が失われつつある。私はコロナ禍で混乱する日々を学生という立場で体験してきたが、新型コロナウイルスが流行する以前の2年間の学生生活と以後の2年間では、異なる点が非常に多く、便利に感じることもあればストレスが溜まる原因ともなることもあったと感じている。では、具体的に以前の大学生活とは異なると感じた点は何かについて、学習面、部活動・サポーター活動面、教師や他学生との交流面の三点に関して記していく。

大学の講義は2020年度の大学生活においては、ほぼ全てがオンライン授業となった。また、授業の形式もそれぞれ異なり、zoomでのリアルタイム視聴型授業、Web Classに資料をアップしたものを個人学習したり、そしてアップされた授業動画を視聴して学習したりするオンデマンド型授業などがあった。オンライン授業のメリットとして、自宅から授業を視聴することができ、通学時間、電車賃等の削減が可能になったということと、オンデマンドの授業であれば個人のペースで時間のある時に授業を受けることができるなど、学習活動の幅が広がったということが言えるだろう。

しかし、私の3年次を振り返ると、常に孤独による不安と疲労感と戦っていたように感じる。理由としては、慣れない授業環境に加えて、教師の顔が分からないことから来る不信感と、他の学生の持つ意見や授業内の雰囲気が無い空間だったからだと考えている。また一つひとつの授業で課題が課されていたことから、毎日小レポートに追われていたことも、対面の授業では無かった疲労が出てきた原因に繋がったと感じている。

部活動とサポーター活動も、コロナ禍において変化した。私は映画研究部に所属していたのだが、コロナ禍になってからは対面での撮影、学外での活動の制限が厳しいこともあり、中々撮影の許可が学生部から降りず、撮影を断念することがあった。このことから今まで当たり前に行なっていたことが困難になり、考えの不一致から部活動に参加しなくなる学生の増加など、部活内の雰囲気も悪くなる事態も起こる原因となった。学内のライブラリーサポーターという団体も同様に、オープンキャンパスや文化祭のオンライン化から、学内でできる活動範囲が狭まってしまったと感じている。

コロナ禍の部活動・サポーター活動で特に大変で深刻な問題になりかけたものとして、新入生の勧誘活動が挙げられる。部活動などの勧誘期間が4月からということもあって、在学生側はオンラインやSNSでの宣伝に慣れておらず、新たな部員、活動メンバーを迎えることが例年よりも難しかった。新入生側は、オンラインでの授業による、大学での知り合いや友人がいないことからの不安から、部活動やサークル、サポーター活動に参加する余裕がなかったのではないかと考えられる。

教師や他の学生と関わる場面も極端に減少した。私は特に、ゼミナールの活動で学生との繋がりや薄さを感じるが多かった。私の所属していたゼミナールは3、4年次の2年間 zoom での授業だったため、ゼミ生と対面で会うことがなく、卒業することとなってしまった。同年代のゼミ生は2年間共に文学について研究してきたからか、どのような人間性なのかわかってはいたのだが、先輩方、後輩の皆とはほとんどコミュニケーションをとる機会がなかったので、一緒に授業した感覚がほぼないと感じている。

コロナ禍で大学生活は変化し、対面に戻りつつある現状でも、オンライン授業で学生が作りあげていた生活習慣や影響は完全にコロナ禍以前には戻っていない。私はこれまでの2年間、コロナ禍での生活を続けてきて確実に身についたのは対応力だと思う。以前の私にとって非日常だった生活に、今日少しずつ対応し慣れてきていると、この2年を振り返って実感している。

#### 4. 空白の一年間 文芸学部国文学科学生

2019年12月初旬、中国の武漢市で第一例目の新型コロナウイルス感染症の感染者が報告されてから、わずか数か月ほどの間にパンデミックと言われる世界的な流行となった。このウイルスは私たちの生活環境を大きく変えてしまった。その中でも私が一番苦痛だったのが部活動の禁止だった。

現在は引退しているが、私はワンダーフォーゲル部に所属していた。主な活動は登山だ。幼い時から空手、野球と運動をしていたので体力面には自信があった。しかし、灼熱の太陽が照らす中、20キロ以上の荷物を背負って山に登ることは想像以上にきついものだった。何度もあきらめそうになったが、仲間や先輩という存在があったからこそ頂上に辿り着くことができた。今思い返してみれば、辛い時も、苦しい時も、喜びを感じた時も、すべてワンダーフォーゲル部の仲間たちが傍にいた。私にとって、ワンダーフォーゲル部の仲間たちは家族同然であり、大学生活のすべてと言っても過言ではなかった。そして、月日は流れ、主将に就任し、これからという矢先、例のウイルスが蔓延するのだ。

このウイルスは私の大学生活のすべてを奪った。授業はオンラインでの授業に切り替わり、同じ学科の友達とも会えなくなってしまった。さらに、部活動は当面の間活動禁止になってしまった。家族同然の仲間たちに会えなくなってしまうことは私にとって苦痛でしかなかった。何かできることはないか幹部同士で考え、ZOOM ミーティングやオンライン上での新歓活動など部員同士の関係が希薄にならないように努めた。しかし、部活のメンバーよりも彼女との時間を大切にしている部員や人と会えなくなって精神的に病む人、音信不通になってしまう人が多くいた。この状況を打開するためにも、個別で連絡を取るといった努力をしたが、全く効果がなかった。この時に改めて「自分の感情や思いは文面では伝わらない。伝えるためには、相手の顔を見ながら話すことが重要だ」というごく当たり前のことを実感することができた。

時が経っても例のウイルスは収束するどころか拡大していた。こういった未曾有の危機的状況だからこそ、仲間がいるから乗り越えることができると思っていた。しかし、現実はその甘くはなかった。あれほど苦しいことや辛いこと、楽しかったことを一緒に共有し、家族同然とも思っていた仲間たちとの絆は希薄になってしまった。それは現在もおお継続中である。何だか見捨てられた気持ちになった。最終的には主将である自分がすべて悪いと思ひ込むようになり、精神的にかなり追い込まれてしまった。

精神的に追い込まれてから一か月の間、何をすることも無気力だった。ただ、このままにもせずに引退することだけは避けたいとは思っていた。そう思っていた時に、新型コロナウイルス感染症対策ガイドラインを作成すれば、条件付きではあるが活動の再開を認めるといった朗報があった。活動が再開すれば仲間たちが戻ってくるかもしれない。そう思い、死ぬ物狂いでガイドラインを作成した。これでようやく活動ができる、そ

う思い学生課に掛け合ったところ、ワンダーフォーゲル部には大会が存在しないため、部としての練習や登山は許可できないとのことだった。私たちにとって、毎月毎月の山登りが他の部活動という大会であり、夏の5泊6日の合宿が最後の大会のようなものであった。そういった理由を一切考慮もせず、一方的に活動禁止と言われても納得がいかなかった。何度も電話でお願いをしたが結果は変わらなかった。おそらく、大学生活の中で一番の絶望だったかもしれない。結果的に、私たちワンダーフォーゲル部は2021年11月まで一切の活動再開が認められなかった。引退最後の年は活動ができず、私にとって空白の一年間となってしまった。

コロナ禍の中で主将を務めたことは大変なこともあったが自分にとってプラスになることも多くあった。部活動という私にとっての居場所が例ウイルスによって失われてしまったのは残念だが、教職の国文学科のメンバーという別の形で自分の居場所を見つけることができた。本来とは違った意味だとは思いますが、教職課程を履修していてよかったと思う。

## 5. コロナ禍と四大戦 文芸学部国文学科 野澤拓真

四大学運動競技大会（以下、四大戦）は学習院大学、成蹊大学、武蔵大学、成城大学の四大学で行われる体育大会である。競技には正式種目、一般種目、教職員種目の三種類があり、毎年冬頃から順次競技を行い、10月の本戦までの期間で競技を行う。2021年度には第72回大会を迎えた。これまでの約70年間で一度も途切れさせることなく開催されてきた四大戦ではあるが、2020年度の第71回大会は新型コロナウイルスの影響により全ての競技が中止、特別式典を以て開催となった。2021年度の第72回大会は正式種目のみに競技を限定して開催した。

私は第72回大会の実行委員長を務めた。2020年12月に実行委員長の任を受けてからおおよそ1年間、準備や当日の運営を含め、コロナ禍における制約やそれによる苦労があったように思う。コロナ禍における大会運営に携わった身として、その経験を記したい。

### ①感染対策の問題

大会運営においてコロナ禍に入ってから大きく変わった点は感染対策である。特に2021年は変異株の出現や度重なる緊急事態宣言もあり、その中でどのように安全な大会運営をするか、そもそも大会を開催して良いのかという問題があった。

正式種目の一部は1～10月の長い期間で行われたり、各部活動が参加するリーグ戦等の結果を反映させたりするため、延期等の措置を講ずることができたり、各競技連盟の指導のもとで大会開催ができていたため、大きな問題はなかった。問題は10月に3日間開催される本戦だった。本戦開催の可否の問題は、緊急事態宣言が主な焦点となった。公的機関が提示しているものが背景にある以上、緊急事態宣言下での大会の開催は難しいという判断を下した。結果としては10月の本戦期間中は緊急事態宣言が発出されなかったため、正式種目のみと規模を大幅に縮小したものの、ひとまず開催することはできた。

また、大会参加者の感染対策についても問題があった。新型コロナウイルスについて難しかったことは、若者にとっては症状が比較的軽く、風邪に近かったことから、感染対策意識に大きな差があったことである。そこで、国の提示する感染対策や、様々な競技のガイドラインを参考に、大会参加者全員に適用する「第72回四大学運動競技大会共通ガイドライン」、本戦期間の参加者に適用する「第72回四大学運動競技大会実施についてのガイドライン【感染防止マニュアル】」を策定し、感染対策を徹底して行った。また、本戦

期間に入構する者は事前にPCR検査を受け、陰性証明としてのリストバンドを配布・提示してもらうことによって、大会参加者を把握できるようにした。

以上のようにして、基本的な感染対策を徹底したことで、大会を開催することができた。2022年以降はワクチンの普及や新型コロナウイルス終息後の規制緩和に向けても議論が必要になるだろう。

## ②大会運営の問題

大会運営について新型コロナウイルスが及ぼした影響は、大会運営のノウハウの継承である。2020年度の第71回大会が競技中止、特別式典のみの開催となったため、引き継ぎが上手くいかず、また、新型コロナウイルスという未曾有の事態ということもあり、2021年度の第72回大会は引き継ぎ資料などの参考にできるものがほぼない状態での運営となった。このまま第72回大会も開催できなかった場合、次に運営の主体となるのは、運営経験がほぼない学年の者になる。第72回大会においても、次の世代にどのようにして運営ノウハウを引き継ぐかが問題になった。

大会運営について、資料が残っていることは当然のこととして、やはり実際の経験が大きな糧となる。しかし第72回大会は種目を限定して開催したため、経験を積むには不十分だった。そこで、本戦期間中に、3年生以下を対象に、引き継ぎを目的とした講習会を開催し、エントリーや記録の方法を中心に、実際に体験しながらの引き継ぎを行なった。これにより大会運営のノウハウが継承されたことと思うが、それ以上に四大学がそこで交流することができ、横のつながりが作れたことがその後の運営について良い影響を及ぼしたと思われる。本戦までは全ての会議がオンラインで、なかなか同期、先輩、後輩と交流する機会がなかったため、皆もその機会を欲していたように思う。仮想空間での交流ではない、リアルな交流の大切さを感じさせられた瞬間でもあった。

## ③おわりに

以上、簡単ではあるが、コロナ禍での私の四大戦運営について記した。コロナ禍において数多くの学校行事や大会が中止になっている今、大学生である我々でさえ大きなフラストレーションを覚えるのだから、子どもたちの辛さは計り知れないだろう。学校行事や大会も、教育上大きな意味を持つと私は思う。感染症と上手く付き合い、子どもたちの成長の機会を奪わぬよう、我々も対策を考えていかなければならない。私自身が四大戦にもがいた1年間の経験が、今後の大会や行事運営に活かされればと思う。

## 6. コロナ禍での大学生活とそれを通して学んだこと 文芸学部英文学科 渋谷光市

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、3・4年次での大学生活は私が1・2年次で経験した大学生活と全く異なるものとなってしまった。特に、授業など大学での学習は大きく影響を受けた。

3年次の4月、すべての授業が5月に延期されただけでなく、オンライン（Zoomを用いたライブ授業、オンデマンドで講義資料が提示される授業など）で行われることとなった。私は大学に通うのに片道2時間かかるため、当初はその通学時間を、課題や教員採用試験の勉強、アルバイトなどに有効活用できるので、オンライン授業になることに対してプラスのイメージを抱いていた。

しかし、いざ5月になって授業が始まると、イメージとは大きく異なるものが待っていた。まず、パソコン疲れである。1日の大半をZoomでのライブ授業やオンデマンドによる課題提出に時間を費やすこととなった。特に、定期試験が行えない影響で、ほとんどの授業が試験に代わるレポートが成績評価の対象となって



いたため、7月は毎日のようにレポート作成に追われていた。1日中家に1人でパソコンと向き合う生活は想像以上に過酷であり、「何のために大学に行っているんだろう？」と何度も自問自答した。

2つ目は、ライブ授業の大変さである。家にはWi-Fiがあるものの、常にインターネット接続がいいというわけではなく、自分の画面がフリーズしてしまったり、他の生徒の発言がうまく聞き取れなかったりと、様々な問題があった。特に、ブレイクアウトルームを利用したグループディスカッションでは、学生によっては接続をスムーズにするためにZoomの画面をオフにしている人がいたが、それにより相手がどう反応しているかが全く把握できないというのも、コミュニケーションを阻害する一因となった。

3つ目は、授業の理解度である。毎日のようにライブ授業と課題があったため、授業を終わらせる、課題を終わらせることに意識が向いてしまい、後で振り返ってみて「この1週間で私は何を学んだのか」をほとんど思い出せない期間が続いた。

そして何より、友達と会う機会が奪われてしまったことである。同じ環境で授業を受けることはおろか、授業が終わった後に遊びに行くことなどは全くと言っていいほどできなかった。加えて、教室で一緒に授業を受けるのと、Zoomで一緒に授業を受けるのでは天と地ほどの差があった。コロナ禍においては、わからないことをすぐに相談したり、授業前後で一緒に課題に取り組んだりする機会がなく、Zoomやオンデマンドでの授業は常に孤独感を抱いていた。

3年次の後期になって、ゼミの授業が少しずつ対面で行われるようになり、初めて先輩や友達と同じ環境で授業を受けることができるようになったが、やはり「友達と同じ空間で授業を受ける」という当たり前のことがいかに重要だったかということを実感した。先生の説明は対面の方がわかりやすく、グループワークも対面の方がスムーズに進み、学びをより深めることができた。4年次になってからはほぼすべての授業が対面で実施され、大学に通い友達と同じ環境で学ぶことの意義をより一層感じることができた。

このコロナ禍での大学生活を通して、多くのことを学ぶことができた。まず、大学で学ぶ意義である。オンライン環境では、先生に質問されたことに答える、提示された課題を終わらせるのように、どうしても受動的になりがちである。対面の授業では、友達と話し合いながら主体的に学びを深めることができ、それが何よりも重要だということを実感した。次に、当たり前の大切さである。大学に通うこと、アルバイトをすること、友達と遊びに行くこと、など学生生活の中で当たり前でできていたことが一瞬でできなくなり、それが私にとっていかに当たり前かつ大切だということを実感した。そして、人と直接会って話すことの大切さである。友達と会うだけでほっとする、たわいもない話をする、遊びに行くことが私にとってどれほど心の支えとなっていたかということに気が付いた。

今まで以上に変化の絶えない社会を生き抜いていくことが求められる中で、大学生のうちにコロナ禍を経験できたことは本当に貴重な経験だと思う。この経験を糧にして、高校教師としての人生をより豊かにしていきたい。

## 7. パンデミックの中で生きた2020年、2021年 文芸学部文化史学科 中澤志帆子

2020年1月、成人式が終了し、大学2年生後期も無事に終わろうとしていた。当時の私は、やっと折り返し地点だと、3年生からの学生生活に胸を躍らせていた。

この時期より、新型コロナウイルス（COVID-19）が発見され、日本国内での感染拡大が危惧されていた。結果的に、日本国内だけではなく、全世界的に感染が拡大したことは今では誰もが知っており、現在でも感染拡大は止まらず、このパンデミックの終結が見えない状況である。

COVID-19が発見された当初、ここまでのパンデミックになること、長期的に私たちの「あたりまえ」の生活が失われてしまうことは、誰しもが想像していなかったであろう。当時の私は、順風満帆に大学生活を送り、学業でもプライベートでも充実した日々が送れるという理想を抱いていたが、それは果たされないこととなった。

ここからは、私の記憶を呼び起こしながら、コロナ禍以降の大学生活を振り返り、書き連ねていく。

新型コロナウイルスの感染が国内で拡大し始めた頃、春休み期間であった私は、新入生（新大学1年生）を迎えるべく、自身が所属するキャリアセンター管轄の就業力サポーター（現キャリアサポーター）として、ガイダンス運営の準備をしていた。登壇者の日程調整、ガイダンスでの発表内容・構成、本番までのスケジュールなど全てをイベントリーダーとして取り仕切り、代替わり前最後の役職とあって気合も十分入っていた。しかし、それらは一つも叶わなかった。深夜に役職・運営メンバーで急遽電話会議を行い、感染拡大が深刻化している中で、どのようにしたら進行できるか、更なる感染拡大が危惧されている中で、自分たちの持ち味を活かして活動するにはどのようにしたら良いかを複数回会議を重ねて話し合った。結果的に、1回目の緊急事態宣言が発出されたことにより、ガイダンスそのものが中止となってしまった。そして、卒業するまでの残り1年半の活動は何もできずに終了してしまっただけで、十分に就業力サポーターとして活動できなかったこと、何よりこれまで先輩たちが築き上げてきたものを後輩に引き継げなかったことが、コロナ禍に入って悔しかったことの一つだ。

次に、大学3年生、4年生の生活を振り返っていく。3年生時は、生活のほとんどが家であった。コロナ禍以前は、趣味のサッカー観戦などに行っていたため、基本的にアウトドアで、家にいないことが多かった。しかし、「ステイホーム」が叫ばれるようになった時、私自身少し、いや大分辛いものがあった。籠もっていないで、家から外へ出ておいしい空気を吸いたいと強く思う日々であった。

3年生前期は全面オンライン授業で、学校に行くこともなければ、先生方、もちろん友達にも会うこともできなかった。顔を合わせる機会があっても、ZOOMの画面越し。フィルターを何十枚も挟んだ状態でしか友達の顔を見ることができず、直接の声を聞くことができなかつたのも悲しかった。

オンライン授業は、一人で黙々とパソコンに向かい、動画を視聴したり、課題のプリントを読んだりなどがほとんどであった。ゼミナールもオンデマンド、演習の授業や教職課程の授業も本来は対面で行いたかったが、それも3年生時は叶わなかった。「面白味」の無い、味気ない3年生前期であった。

3年生後期になると、少しずつ感染の拡大も緩やかになり、対面とオンライン授業を併用する形となった。ステイホームが徹底されていた時に比べてみれば、友人やゼミ・教職の仲間と会う機会は増えたが、以前のように元の生活に戻ったかと言われたら、そうではなかった。

4年生時は、一時対面授業ができないということもあったが、教職の授業やゼミナールを中心に対面の授業をすることができた。教育実習もコロナ禍ではあったが、準備を積み重ねて臨むことができた。教員の立場となって母校に凱旋できたことは、私の人生においてとても良い経験となった。

私がコロナ禍での大学生活で重視したことは、スケジュール管理と時間のコントロールである。オンライン授業は、自分のペースで受講が可能である。そのため、授業や課題をいつまでに、どのくらいのペースで進めて行くかを自分で目標立てをして行くことが重要であると感じた。

また、来年度より大学院に進学するため、それに向けた準備はもちろん、自身の研究の時間、教職に関係する教科の知識をつけるための勉強、さらにはプライベートなどどのように両立していくかを考えていくことができた。「家にいるから」と怠けてしまう私を、私自身で震え立たせながら過ごしていくことを心が

けた2年間だった。

ここ2年間の大学生生活は「あたりまえ」が通用しない、歯痒い生活であった。だが、私自身数多くのことを考え、成長することができたと思う。コロナ禍で自由が無い、悔しい2年間ではあったが、学部学科・他学部友人をはじめ、教職課程で切磋琢磨してきた仲間たちや先生方に支えられて、ここまで充実した大学生生活を送ることができた。感謝しても仕切れない。コロナ禍で様々な制限がかかる中、いかに充実した大学生生活を送るかを自分なりに考え、行動してきたことで、より記憶に残るような日々が送れたと思う。

そして、来年度からは大学院生として新たなスタートを切る。まだしばらくはパンデミックが続き、先行き不透明であるが、大学生生活で経験したことを活かし、周りで支えてくれる人たちに感謝しながら、更に成長していきたいと思う。

最後に。たくさんの学びと経験を与えてくれてありがとう、成城大学。

## 8. コロナ禍と大学生生活 文芸学部文化史学科 湯本由稀也

私の大学生活の中で3、4年次がコロナ禍で過ごした大学生活にあたるため、3年次以降を取り上げて書いていきたいと思う。

コロナ禍での大学生生活を語る上で1番大きな変化と言え、[オンライン授業]であると思う。3年次、初めてオンライン授業を受けた当初、大学側も学生側もいくつかの混乱がある中で授業が行われていた。zoomを通した授業形式、レジュメが載せられており自分で学習するオンデマンド形式、など様々なスタイルで授業がなされていったが、そもそも、zoomなどを初めて使う人間からしたら、使い方はもちろんのこと、多くの初体験や困難の中で授業をすることになった。今では難なく使えているものも、初めは困惑したものであった。

zoomを通した授業、例えば、教職関係の授業などでは、今まで対面で受けてきた分、オンラインではどことなく寂しさを感じるようになった上、一方的な授業になりがちな状況に悲しさを感じることも多かった。先生方も多くの工夫をされており、授業回数を経るごとに双方向的な授業が作られていき、従来の形に近いものになっていったことに満足したものであった。しかし、オンライン授業より対面授業の方が、人との触れ合いや授業進行の面からも良いとは感じている。

オンライン授業の良い面も同時にあったことを書いていこうと思う。それは、時間を有効に活用できた点であると思う。オンデマンド授業が増えていき、今まで席についていなくてはいけない時間に授業に入る必要がなくなった分、自分の中で時間を有効に利用することができるようになり、自分の時間を多く作れた。オンラインによる時間の有効活用、これは学生生活に限らず、これからの働き方にも関係していくことであろう。

授業に関してはここまで書いてきたため、ここからはそれ以外の面について書いていこうと思う。コロナ禍によって大きく変わったこととして、そもそも、大学に行かなくなった。これは、今まで友人とお昼を一緒に食べたり、授業がない時間遊んだり、図書館で勉強したりすることがなくなったのであった。当然、部活動の活動も制限され、大学に行く意味がなくなってしまった。なくなった後からの回想となるが、以上の事柄の多くで大学生活は成り立っていた、ということに改めて感じるようになった。大学生活は60%の授業と40%のその他活動によって成り立っている、と考えている。コロナ禍において、40%もの大学生活が失われていったのであった。

ここまで書いてきた内容は主に3年次のことである。4年次では、少しずつ学校にも行けるようになり、

元の生活とまでいかないが、大学生活らしさは取り戻せてきてはいる。しかし、昨今、新型コロナの第6波が来ており、3年次の状態に戻りつつある。このコロナ騒動がいつまで続くのかは当然わからないことであるが、早期収束、以前のマスクがない生活にまで戻ることを祈りつつ、このレポートを終わりにしたいと思う。

## 9. コロナ禍と大学生活 法学部法律学科 戸村晟也

新型コロナウイルスとの生活(with コロナ)も、間もなく丸2年を迎える。これほどまでに長期間にわたって猛威を振るい、生活の変化を余儀なくされるとは、コロナの発生当初は思ってもみなかった。現在では新たな変異株の流行により、新規感染者数が連日過去最多を更新し、その勢いは衰えるどころか増す一方である。

こうしたコロナ禍の中、私たちの生活は大きな変化を強いられている。今まで当たり前できていたことができなくなり、生きづらさを感じている人も少なからずいるだろう。私もその一人である。今回は「コロナ禍と大学生活」というテーマを基に、コロナ禍によって何がどう変化したのか、その際自分自身がどう感じたかを、実体験を踏まえた上で述べていくこととする。

コロナ禍の大学生活における最大の変化は、やはり授業に関してである。私は大学3年～4年生(2020～21年度)でコロナ禍を経験したが、そのうちの約1年間近くを完全オンラインで授業を受講した(2020年度前期、2021年度前期の一部)。授業が対面で実施されるのか、オンラインでの実施となるかは、流行状況に左右される部分も大きく、大学からの情報を頻繁に確認しそれに合わせて対応していたことをよく覚えている。オンライン授業は、場所や時間を問わず受講できる、課題提出を通して文章力がつくといった利点も感じたが、私はやはり対面での授業が自身にとって非常に有意義であったと感じる。

私はゼミ(専門演習)や教職課程の授業が対面で行われていたため、他の学生に比べ大学に通う回数も多かったが、周りの友人に話を聞くと「ゼミもオンラインで2年近く大学に行っていない」「大学の友達と会う機会が減った」という声が数多く聞かれる。確かに、大学の様々なコミュニティの友人と会うことや、先輩に就活や授業に関して話を聞くこと、後輩と交流し合うことといった機会は、コロナ禍前と比べて大きく減った。これは大変残念な事である。

しかしそうした状況であったからこそ、授業が対面で行われた際には、相手の雰囲気や温度感がダイレクトに伝わり、オンライン上(Zoom等)ではあまり感じ取れなかった友人の温かさや授業の臨場感を感じることができた。また対面授業が行われることで、授業以外での交流も自然に行われ、仲間との関係を深めることができた。こうした点において、やはり対面授業を行う意義があると私は考える。

今回コロナ禍での大学生活を振り返り、正直このような状況で無ければ、大学生活を通して更に多くのイベントや幅広い人々との交流など、取り組めることも多かったように思う。ただ限られた環境ではあったものの、非常に充実した日々を送れたこともまた事実である。オンライン授業ではより主体的に参加することが増え、対面授業でも一つ一つの授業をより集中して、意欲的に取り組むようになった。また普段から友人に簡単に会えない分、授業を通じた友人との交流は、とても充実したものとなった。今後、新型コロナウイルスをめぐる情勢は一体どうなっていくのだろうか。一刻も早く事態が収束することを祈りつつ、このコロナ禍で大学生活を送った経験をこれからの糧にして、日々精進していきたい。

## 第三節 コロナ禍と学生生活

本節では、大学以外の場も含む受講生たちの生活全般に対して、コロナ禍がどのような影響を及ぼしているのか、そして彼ら／彼女らはその影響を契機としてどのような精神的な揺れ動きを経験し、コロナ禍とどのように折り合いをつけようとしているのかを見ていくこととしたい。

### 1. コロナ禍と学生生活 経済学部経営学科学生

私はコロナ禍の時代に大学3,4年を過ごした。コロナ禍の前と後で学生生活は大きく変化した。それは良い方向にも悪い方向にもどちらにもである。本レポートでは、コロナ禍の前後で私の学生生活がどのように変化したか、その際に何を感じたか、授業の受け方、友人との過ごし方、アルバイトの仕方に分けて述べていく。

初めに、授業の受け方である。大学1、2年の頃は、通常通りすべての授業を対面で受けていた。90分間の講義を友人と一緒に受け、レポートは年に数回、授業時間外に作っていた。大学3年では、全ての授業がオンラインになった。オンデマンド式のものもあればズームでやるものもあり、あるいは日によってズームでやるかオンデマンドでやるのかが変わるといった授業もあった。初めはどのように受講すれば良いのか、何を留意し、どう課題を提出すれば良いのか戸惑うばかりであった。そのような時、友人と連絡を取り、離れていながらも互いに相談しながら、何とか開始までに万全の状態ですべての授業を受けられるようになった。

オンライン授業は、私にとってはとても良いものだった。特にオンデマンド式のもの、期限までであれば好きな時間に受講でき、更に授業中も分からないことがあれば途中で調べられるなど、自分のペースで受講できた。調べても分からないことは気軽に先生に質問できるコーナーもあり、対面の授業よりもきめ細やかに学ぶことができた。何より家から学校に行くまで1時間かかる為、レポート作成に時間がとられるものの、大幅に時間を削減でき、かつ満員電車に乗るといったストレスから解放され、より有意義に一日を過ごすことが出来るようになった。また、ズームの授業ではグループ活動をするものもあったが、そこでも対面の授業では話すことのなかった人たちと交流でき、学びを深めることができた。このように、オンライン授業は私にとってはとても良いものであった。

次に、友人との過ごし方である。世間では、オンライン授業の難点として、友人と交流する機会がなくなったという声もあったが、幸い私の場合は大学1、2年の頃にできた友人と、夜中などにテレビ電話で話す機会があり、孤独感に襲われることは全くなかった。ただ、外に遊びに行ける機会はずっと減ってしまった。コロナ禍前は、せっかくの大学生活なのだから海外旅行に沢山行きたいと思っていたが、海外どころか国内ですら、全く旅行に行けなくなってしまった。しかし、コロナ禍が落ち着いた頃になると、徐々にではあるが安全対策をしっかりととった上で、どこまでなら行けるか、何までなら出来るか考えて、友人と外出も出来る様になった。今はコロナ禍がこのまま落ち着いて、卒業旅行に行けることを願っている。

最後に、アルバイトの仕方である。私は現在、塾講師のアルバイトと、保育園での保育補助のアルバイトをしている。塾の方では、コロナ禍が始まった時は休校となり、仕事が全くなくなった。2週間ほどすると、再開されることになったが、ズームで授業をすることになった。ズームで授業を行うのは想像以上に難しく、特に小学生に対する授業は、反応がないのでちゃんと聞いているのか、どこまで理解しているのか分からず、

とても悩んだ。精神的にストレスを強く感じた。コロナ禍が少し落ち着くと、対面での授業が再開されることになったが、教室はアクリル板が設置されたり、通常の2倍のブースを使って授業をしたり、検温・消毒が必須となったりと、環境が大きく変化していた。手間が多くなったものの、ズームでの授業を経験した分、対面での授業のやりやすさを実感した。保育園での保育補助のアルバイトでは、おもちゃの消毒や毎日の検温など仕事が増え、保育士や職員の負担が大きくなっていると感じた。しかし、普段友達と中々会えない分、保育園では多くの子供たちや職員と話すことができ、とても楽しかった。

以上のように、コロナ禍の前後で私の学生生活は大きく変わった。色んなことが制限され、悩んだこともあったが、その中でも工夫して、いかにより良く学生生活を送れるようにするか考えるようになった。総合的に見ると、私なりに楽しく学生生活を送ることが出来たと思う。これも友人や家族、大学の先生や職員の支えがあってこそだと思う。これら多くの人々に感謝しつつ、大学時代の学びを活かして、これからの人生をしっかりと歩んでいきたいと思う。

## 2. コロナに奪われた私の学生生活 文芸学部英文学科学生

コロナ禍で家族との関係、友人との関係がかなり複雑になり大変な思いをした。

まず家族との関係を述べる。埼玉県の実家に住んでいる私は、コロナ禍の前は常にリビングにみんながいて仲よしだった。コロナ禍になり、埼玉県内で働く親と姉、私は都内の大学に通っている。そのため、私にはもちろん都内に友達もいた。大学の授業がなくても都内に出かけることがあったため、外にいるようにしたり、個室にしたり、コロナにかからないように最大限の注意を払っていた。外出も極力少なくはしていた。都内に出てる分リスクも高くなることも分かっており、コロナの知識をきちんと付けることが重要だとも思っていたため、ニュースを見て勉強をしたり調べたりして外出していた。

しかし、埼玉県内で働きながら過ごしている家族からしたら、私はバイ菌のようなものであるのか、必要な外出ですらよく思われなかった。換気が良い外で人と2メートル以上離れていても空気感染するんじゃないのか、というような間違った情報で私を責めることもあった。絶対に家族の中で1番コロナの知識があり1番気をつけている自信があったから悔しかった。家族仲が悪くなるのは避けたかったため、極力外出をせず、家族にも正しいコロナ知識を伝えたり、家族の目に見えるように消毒をしたりもした。コロナに慣れてきた今、全員で協力し気をつけるようになってきてはいるが、やはり、都内に行くことが多い私は居場所が無い気持ちになることもある。

次に友人との関係を述べる。日常生活で辛いことがあっても友達と遊んだり話したりすることでストレス解消になっていた。

大学4年生の夏休みは、都内感染者数5000人超という酷いコロナ禍であった。しかし、学生生活で最後の夏休み、私の周りでは遊んでいる人がほとんどであった。大人数で飲み会をしていたり、カラオケをしたりしていた。上記のように私はかなりコロナに敏感で徹底して気をつけていたが、学生生活最後の夏休み楽しみたい気持ちは大いにあったため羨ましくて仕方がなかった。それと同時に今まで仲良くしていた友人がSNSに大勢で遊んでいるのを載せていると、失望してしまい嫌になってしまうこともあった。また、友人から遊びの誘いがあっても全て断っていたために、嫌われてしまうのではないかという恐怖心もあった。断ることが申し訳なく、少しコロナ禍が落ち着いた時に遊ぶ約束をしたこともあった。しかし遊ぶ日が近くなるとまたコロナ禍の波が現れ、延期してもらった。その延期の日もコロナ禍が酷く更に違う日にしてもらったこともあった。延期に延期を重ねてしまい、さらに申し訳なくなり自己嫌悪に陥ってしまった。本音を言

うことしかできなかつたため、万が一のことを考えるとコロナが怖くて遊ぶことが出来ないと正直に友達に話すようにして、遊べそうな時は自分から連絡すると約束をして、しばらくの間遊ぶ連絡をしなかった。人間関係はコロナ禍でなくても難しいのに、このような事態になり本当に苦労した。

家族のなかでさえコロナへの考え方が違うため、世の中の人とコロナへの価値観を合わせるのは本当に大変なことなのだと思う。いつ終わるか分からないコロナ禍で他人とどう生きていくか考えることが今後も必要になってくるだろう。

### 3. コロナ禍と学生生活 文芸学部文化史学科 窪田正喜

2021年7月末、初の無観客で開催された「東京オリンピック2020」がTVで放送された。当初の2020年7月開催予定から、スケジュールを一年延期されての開催である。私はスポーツ、特にバスケットボールが大好きだ。アメリカのNBAで活躍する八村塁選手を擁する男子代表や、のちに今大会で華々しく銀メダルを獲得する女子代表。彼らの雄姿を見ることができると思うと、さらには日本に世界各国のスターが集まると思うと、私はますます期待が高まっていた。そんな大好きなバスケットボール日本代表の試合を、私は病院のベッドで観戦していた。

当時の私は、新型コロナウイルスに感染して入院中であった。38度の発熱と咳がひどい症状だった。私は軽症ではあったが、運よく入院することができるタイミングだった。実際、あと一週間遅かったら、若者の私は間違いなく自宅療養を強いられていたであろうという時期であった。とはいえ、ハッキリ言って私にとって自宅療養なんて到底困難だ。なぜなら、自宅療養で家族に感染させてしまう危険性を想像すると、本当に怖くて不安で仕方がない。実はこのとき既に、私は父親にコロナウイルスを感染させてしまっている。父親も同じ病院に入院していたが、父の症状が悪化していくのを見ると、回復していく自分を憎らしく思うほど心が荒み、絶望感に追いやられる。

結論から言えば、私も父親も無事に回復し退院することができた(私は嗅覚障害などの後遺症が残ったが)。しかし、このような治療法の確立されていない感染症は、身体だけでなく「心」までも蝕んでしまうところに本当の恐ろしさがあるのだと思う。

こうして、自分自身が新型コロナウイルスに感染して以降、それまで以上に感染防止対策を徹底するようになったし、また友人や家族とも極力会う回数を減らすようになってしまった。その結果、私は教育実習が中止になり、大好きなバスケットボールもなかなか出来ない状況が続くなど、私の人生においてもコロナウイルスはいまだに大きく影響している。

コロナ禍において、人々の文化的・社会的交流や経済活動を衰退させてしまうなど私たちの生活は一変し、大きな被害がもたらされたのは言うまでもないだろう。しかしながら、「新しい生活様式」と呼ばれるニュースタイルの生活にポジティブな価値を見出すことが、今の私たちにできる最大限の努力ではないだろうか。

例えば、教職関連の話題に即していえば、ICT技術の活用が学校場で急速に促進されているのは、「新しい生活様式」の偉大な功績と言える。これに伴い、小中学生は一人1台タブレット端末が支給され、授業に導入されている。これにより、今までよりも多様かつ効率的な授業実践・方法が期待される。大学生においても、その是非は問われるがオンライン授業によって授業の満足度が上がったという調査もある。個人的には、対面方式による授業の楽しさを捨てることはできないが、確かにオンライン方式であれば「いつでも」「どこでも」「何回でも」受講できる点で大きなメリットがあるだろう。

私はオンライン授業のこの「いつでも」「どこでも」「何回でも」学ぶことができるという点に大きな期待

を膨らませている。これを小中高の授業においても可能性を広げてみたいと考えている。もちろん、文部科学省が提唱するように「主体的・対話的で深い学び」の推進には意義がある。そのための討論授業やグループワークなどは対面方式でなければ難しいだろう。しかしながら、その「深い学び」に至る前段階の、基本的知識の理解などについてはオンライン授業でも十分対応できるのではないだろうか。

当然、生徒によって学習意欲にバラつきがあるから、すべての生徒がオンライン授業で勉強するとは限らない。とはいえ、その教科の学習意欲が高い生徒や、何らかの事情で教室に参加できない生徒などにとっては、オンライン授業の需要が高いのではないかと考えている。

そこで、私は成城大学を卒業後は、オンライン授業の普及・推進を担えるような活動をしていきたいと考えている。

新型コロナウイルスの影響で、たしかに私たちの生活はそれまでと一変してしまった。しかし、それを全て悲観的に捉えるだけではなく、一歩でも前へと進めるようにポジティブな側面を探し出すことが、今の私たちに最も必要なことなのだと考えている。

#### 4. コロナ禍のドイツ留学 文芸学部ヨーロッパ文化学科 阿部大河

私はドイツでパンデミックを迎えた。当時のドイツ社会の動揺、緊張感は今でも忘れない。

2020年2月、日本に帰航したダイヤモンド・プリンセス号でCOVID-19が確認され、日本が騒ぎになっていた時は、完全に対岸の火事だと思っていた。3月に入るとイタリアで感染者が増え始め、不安が広がり始める。だがこの時点でも、まさかパンデミックになるとは思ってもいない。そのため、私は普通にベルギーに旅行していた。しかし旅行中、イタリア以外の国でも次々とコロナの感染者が現れ始め、急激に感染者数が増えていく。ちょうど3月の二週目あたり、危機感を抱き始めたのはこの頃からである。ドイツに帰った時には感染者が急増しており、混乱が広がっていた。その次の日に、ドイツは国境封鎖を決めた。まさに紙一重だった。日に日に規制が強まり、日本大使館からの連絡が息つく間もなく送られてくる。私のいたバイエルン州もロックダウンし、外で友人と会うことができなくなってしまった。ほとんどの日本人は留学を中断し帰国した。だが、私はその中でも留学を継続することを選んだ。

コロナ禍における留学の特徴は大きく二つある。孤独化とカルチャーショックの喪失である。留学において学業が大事なのももちろんだが、筆者がそれ以上に重要だと考えるのは、実生活の中でカルチャーショックを受け、自分の価値観・常識が揺さぶられる経験だ。しかし、コロナ対策によって様々な活動が制限され、人的交流も少なくなり、リアルな経験ができなくなってしまった。そうしたコロナ禍での留学は孤独であり、虚無的な日々を過ごすことになった。

それではより具体的に、コロナ禍が留学生活に及ぼした影響を四つほど取り上げ、振り返ることとしたい。

一つ目が語学への影響である。友人との接触が制限され、パーティや飲み会も無くなり、課外活動も制限されたことで、ドイツ語を使う機会が大幅に減少した。もちろんオンライン授業やZoom飲み会など、完全にアウトプットの機会が無くなったわけではないが、家にいる時間が長くなり、強制的に外国語を使わなければならない状況は少なくなってしまった。留学生活では、スーパーでの買い物やカフェ、交通機関の利用など、日常の様々な状況で外国語に接しなければならない。時には偶然に友人と会って会話になったり、人をお願いをしたり、助けを求める状況も起こる。そうしたある意味強制力のある環境にいるからこそ、語学力も身につけてくるのだが、自宅にいてどうしても母国語の使用頻度が増えてしまい、語学力が伸びづらくなる。



二つ目は孤独化である。留学の醍醐味の一つは、多種多様な人に出会えることだ。留学先の現地の人はもちろん、他国からの留学生と交流し、コネクションを築くことで、自分の世界が広がり、様々なきっかけや刺激を得ることができる。だが、人と会うことが制限され、かつ授業などもオンラインになったことで、そうした機会は失われた。オンライン授業では、授業だけのつきあいになってしまうし、自国から参加する人もいるため直接会うことができない。したがって、プライベートな関係が築けなくなり、交友関係の構築が難しくなった。オンライン上でもある程度信頼関係を築くことは可能だが、困った時に頼りにしたり、気軽に連絡を取ったり、長いつきあいになるような友人はできないことが、コロナ禍を通じてわかった。異国の地で生活する上では、信頼できる人を作ることは大切だ。そうした人と会えない、かつ新しい友人も作れなくなることで孤独に陥りやすくなってしまった。

三つ目は、文化的体験の喪失である。私は地域のアマチュアオーケストラに所属していたが、パンデミックによってコンサートやヨーロッパの演奏旅行が中止になってしまった。こうしたコンサートやスポーツ観戦、その国独自のお祭りやイベントを通じて、現地の人たちとの交流が生まれ、留学先の国の文化や慣習をより深く理解することができるようになるが、それらは軒並み中止になり、留学中の楽しみが減ってしまった。

四つ目は差別である。コロナ禍以前から差別がないわけではないが、より顕在化したように感じる。私自身も地下鉄に乗ったときに、ドイツ人の男性二人組に「コロナウイルスが乗ってきた」と言われたことがある。その時は恐怖のあまり、動くことができなかった。また、バスや電車に乗ったときに、私の近くの席を避けるような行動をとる人もいた。ある意味差別の恐ろしさを、身をもって知ることができたが、それ以降、外を出歩くのが少し怖くなった。ただし、決して国内全体が差別的な雰囲気になったわけではない。中には私がマスクを忘れて店に入れなかった時に、マスクを差し出してくれた人や、日本のことを心配してくれたドイツ人も多くいた。

現在は私がいた時に比べると、規制が緩和されてはいるが、それでもなおコロナ禍以前にできたような留学経験は十分にできないだろう。オンライン留学というものも現れているが、先にも述べたように、留学の真価は、現地で自分の価値観・常識が揺さぶられる経験にあると考える。今後コロナ禍以前の世界に戻るとは考えにくいですが、一刻も早く安心して留学ができる世界に戻ってほしいと願う。

## 5. コロナ禍と学生生活 文芸学部ヨーロッパ文化学科学生

コロナ禍において一番変化したと感じたのは、対面授業から遠隔授業に切り替わったことにより、時間の使い方が大きく変化した。このように、生活が変わっていったことにより、どのように過ごしていくのかということを考えるきっかけになった。特に、遠隔授業に切り替わったことにより、通学に使っていた時間がほとんどなくなったので、いっそう時間の使い方について考えるようになった。その中でも、遠隔授業に切り替わって良かったところと、逆に、不便になったところがどちらもあった。今回は、便利になったところ、不便になったところと、それぞれの意見について述べていく。

まず、便利になった点について述べていく。1番最初に感じたことは、通学時間が大幅に減少したことである。対面授業で、1限がある日には毎朝5時半起きしてたからだ。他にも、5限まである日には家に帰るのが、8時ごろになってしまった。このように、今までは授業以外の1日の時間を通学に費やしてしまったのだ。

遠隔授業になってからは、1限がある日でも8時起きになった。最初はいきなり遠隔授業になり、戸惑っ

たこともあったが、徐々に生活にも慣れ始めた。通学時間に充てていた時間をより充実したものにするべく、忙しい家族に代わり、自分が家事を行うようにした。他にも、空き時間で他のやりたいことも行った。このような生活のある新聞社に意見として送ったところ、見事自分の書いたものが掲載されたのだ。このように、通学時間が減少したことにより、時間に余裕を持つことができるようになったので、時間の使い方について考えるようになった。

次に、不便になったことについて述べていく。対面授業のときは学校に行くという風にメリハリをつけていた。しかし、家から出ない生活を送っていたことにより、ずっと夏休みのような生活になってしまった。朝は遅く起き、夜更かしをし、ほとんど部屋着でいるという生活になってしまった。このような生活になって、社会人になったときに、やっていけないということを強く感じた。

このようなことがあってから、目覚まし時計をかけ決められた時間に起き、時間割のようなものを作ったり、授業を受けたり、気分転換したいときには、ネットカフェや喫茶店に行き、とにかく気持ちにメリハリをつけることを徹底して行った。その結果、以前のような生活を取り戻すことができた。

このように、対面授業から遠隔授業に切り替わったことで時間の使い方についてよく考えるようになった。特に、通学にあっていた時間をどのように別の時間に使うのかということは非常に考え深いということを感じた。コロナ禍で普通の大学でも遠隔授業を受けられるということが証明されたので、これから変わっていくということを考えた。実際に今年度大学に入った弟は遠隔授業と対面授業をうまく使い分けて、課題やアルバイトをこなしていると、話していた。このように、自分の弟のような大学生が増えていくと考えた。

## 6. コロナ禍と学生生活 法学部法律学科 神谷航希

昨今のコロナ禍による影響は非常に広い範囲に及ぶが、私が実生活で感じた影響は以下のようなものである。

- ・テレワーク化による社会の変化が与えた影響
- ・家庭内における関係性の変化
- ・就職活動の傾向の変化

第一に、今回のコロナ禍によって、世界的にテレワークが広く普及したことは周知の事実であるが、企業がテレワークを行うことで、就業している家族も家に滞在するようになり、家の中に家族全員が揃うようになった。これは家庭内の関係性や意識の変化をもたらした。加えて、私企業がテレワークへと移行することで、就職活動もオンライン上で行われることがほとんどになり、こちらも後述する就職活動へと多大な影響を及ぼした。

第二に、家庭内における変化は前述したように、家庭内に家族全員が揃うという状況が日常的に発生したことに起因する。その変化は例えば、「それまで家事等の手伝いをしてこなかった者が手伝いを進言してくるようになった」、「家族間の会話が増えたことで理解が深まった」などの良い変化と、「現代の時流にそぐわない差別的な考え方を家族が持っていたことを知り、それを受け入れられずに口論になった」、「改めて家族の悪い部分を直視せざるを得ない状況になり、嫌悪感を抱くようになった」などの悪い変化がある。これらは、私の家庭内での交流不足を原因とした問題が、コロナ禍を契機として表出しているだけであろうとは思いますが、家庭内の不和は子どもの教育過程で悪影響を及ぼす要因となるものであるため、それまでとは違う生活様式を強要されることに対するストレス、プライベートな時間の少なさなどもあってか、多くの家庭で何らかの不和・不都合が現れたのではないかと感じる。

第三に、就職活動の変化であるが、私は就職活動を行うにあたって、実際に対面での面接を行ったのは10を超える企業の中で2社だけであった。その2社も最終面接や自社制作テストを受講するためなど、限られた時にしか対面で行うことはなかった。また大きな会場を使った就活フォーラムなどの、就職活動の代名詞的な催しには参加することがなかったり、エントリーシートの書き方や面接の練習を友達と互いに添削し合ったり、OB・OG訪問もしなかった。人によってはSNSの就職活動系コミュニティに参加したという人や、OB・OG訪問をした人もいたようなので、一概にすべての就職活動が制限されたというわけではないが、よほどの熱意を持つか、主体性のある人くらいだろうと感じており、私のような受け身の人間からすれば、全体として就職活動をやった、という実感が湧き辛い一年であったのではないかと思う。

ただ、不利益のみであったかと言われればそうでもなく、企業側もインターネットを積極的に利用しての求人を行っていたので、幅広い業界分野の見識を広めることができたし、従来の対面では出来なかった、13時に説明会に出席した後に別の企業の面接を14時から受ける、といった詰まったタイムスケジュールを組めるために、選考を従来の就活生よりも多く受けることができたり、交通費をかけずに済んだりしたこと等はオンライン化が進んだことの利点であると感じる。

私の考えとしては、これらの経験は歓迎すべきものだと思った。というのも、社会全体がオンラインでの活動に慣れたことでその利便性を理解し、これから先はフレキシブルな生活が積極的に行われるであろうと考えるからである。就活現場にとどまらず様々な場面で対面とオンラインが織り交ぜられて使われているのもその証左で、教育現場のように対面であることの意義が大きい分野があれば、オンラインで全ての業務が片付いてしまう分野もあるのであって（実際に知人の勤めている企業では業務の全オンライン化に伴い社屋を廃止した）、オンラインでできること、できないことを強制的に振り分けられたことは私たちにとって大きなメリットを生むのではないだろうか。今回のコロナ禍によって悪影響を被った点が多いが、自分にはどうしようもないことに考えを巡らせて悲観的になるよりも、もたらされた変化に対して、自分にできることを考えることが大切なのではないかと学んだ一年だった。

## 7. コロナ禍で掴んだ光 法学部法律学科 長野愛

どんな時代に生まれても、人のせいにすることなく元気だったらそれで良い。これが、私のモットーであります。普段は前向き、ポジティブの私でも、さすがにこのコロナ禍は予測出来ないほどの苦勞と疲勞がつきまといました。というより、つきまっております。

まず、精神面。コロナ禍では、人と接しない、外に出ない、いわゆる引きこもりのようなライフスタイルが推奨されております。しかし、私は、人と出会うことが大好き。アウトドア派で大学時代こそ社会に出る前の時間の自由がきくことから、海外留学や海外ボランティアに行き、様々な体験をしようと楽しみにしておりました。けれども、海外との交流はおろか、国内旅行でさえ白い目で見られるようになってしまった現在、私の好奇心旺盛な外交的な性格はマイナスになってしまいました。この、自分本来を否定されてしまうかのようなコロナ禍は精神的に不自由であります。

大学で楽しみにしていたサークル活動、旅行、素敵なキャンパスでの図書館などの時間、友達とのランチタイムのおしゃべり、そして教授の対面授業、当たり前のようにあった日常がリモートというカタチで奪われて、悔しかったです。バイト先が飲食店だったために、規制が入りほとんど仕事もなくなり、真っ白になったスケジュール帳、緊急事態宣言のころは、頭がおかしくなりそうなくらいでした。それでも家族で、夜中の人が少ない道路を散歩したり、家で料理を作ったり、感染対策を考えながら今の自分に何が出来るのか、

何をしていくべきなのか真剣に考える時間にもなりました。

しかし、このコロナ禍で見えてきたこともあります。私が本当に必要としていたものがわかったのです。付き合いで、仕方がなく行っていた飲み会などを辞めて、自分が大切に思う人と時間を過ごすようになりました。本当に重要なことが気付く機会になったとも言えます。

そして、こんなコロナ禍ですが、新しい出会いもありました。母校の小学校の校長先生から「学習指導員をやってみないか」と、声をかけてもらったことです。コロナ禍での学習の遅れを取り戻すために、住んでいる市が補助教員の予算を付けてくれたのです。自分を慕ってくれる子どもたちとの時間は、とても充実していました。教員でもない私、学生とも言えない私だからこそ閉鎖的な学校現場に新たな風を巻き起こせたような気がします。教科書で学べないことを子どもたちに伝えられたと自負しております。他にも近所の歯医者さんにも「助手をやってももらえないか」と、誘われて昼間、バイトすることが出来ました。大学がリモート授業でなければ、このような出会いはなかったと思います。社会に出る前の、この貴重な時間をコロナ禍で過ごし、懸命に生きて、もがいたことで見えて来た光。自分の未来。正直、就職活動も楽な道のりではなかったけれども、自分なりに考えて挑戦して掴み取ることが出来ました。どんな時代になってもへこたれない！元気に、前に前に進んでいきます。

## 8. コロナ禍と学生生活 法学部法律学科 柳沼順子

私は、コロナ禍における生活の変化について、3点述べたい。

1点目は、アルバイトについてである。コロナが流行した当初は、ほとんどアルバイトに行かなくなった。そのため、収入が減少した。しかし、2020年の9月以降、学校生活サポーターとして中学生の支援を行うようになり、少しずつ収入が増えた。コロナが流行している現在でも、私はサポーターとして、定期的に中学校に赴いている。

2点目は、家族や友人などの人間関係について、私も含め、家族は長時間家にいるようになったため、些細なことで衝突することが増えたように感じる。これは、気づかぬうちにストレスを溜めていることが考えられる。

そして、友人関係においては、大学に行かなくなったため友人と会話する機会が減多になくなり、連絡をとることもほとんどなくなった。しかし、大学に通うようになると、偶然顔を合わせる機会があり、それからまた会話をする、連絡をとるようになった。これは、大学に通うことを許可された良い結果である。

しかし、大学に通っても、まったく顔を合わせる事がなくなった友人、知人に関しては、会話をすることもなければ、連絡をとることもない。コロナが流行する前、大学に通っていた時は様々な人間関係の輪の中で活動しなければならなかったが、現在は限られた人間関係の中で活動し、ほとんどの時間を自分のために使っていると思う。

このことから、コロナ禍の影響によって、生活が一変し、関わる人間関係も非常に変化したと言える。本当に連絡をとりたい、関わりたい人間、友人、知人は誰なのかを明確にする良い機会だったと言える。また、本当に連絡を取りたい、関わりたい友人、知人にほとんど会えなくなったことで、知人、友人の存在のありがたみを実感した。

3点目は、就職活動と教育実習である。

就職活動では、コロナ禍であるためオンライン面接が行われた。オンライン面接は面接官との対話において、間の取り方や一つ一つの動作を意識しなければならず、多くの練習を行った。また、自己分析を行い、

自分の性格、特性を理解することができた。面接では、自分のことをよく理解して表現しなければならないため、自分をどのように表現して相手に伝えるべきかを考えることができた。

教育実習では、コロナ禍であるため実習生の下校時間が短くなり、17時半の下校となった。そのため、教材研究等の授業準備を行う時間がほとんどなく、少ない時間の中で、どのように限られた時間を有効活用するのが重要であった。少ない時間の中で貴重な経験をさせていただいた先生方、生徒の皆さんに対しては、感謝しかないと感じている。コロナ禍の教育実習は規制も多く、大変であったが、様々な体験を行うことができた。

就職活動と教育実習を通して、自分が今後、どのように自分の良さを生かして、生きていくべきなのかを考えることができた。コロナ禍の学生生活は、自分を見直す機会であった。

## おわりに

2020年2月以降の2年間に及ぶコロナ禍の自分自身への影響を記した、合計25名の大学4年生のレポートを見てきた。それらのレポートを通じて、コロナ禍がそれぞれの学生に対してどのような影響を与えてきたのか、また与えつつあるのかということの一端を認識することができたのではなかろうか。

教育実習について言えば、2020年度のそれと比較すると、昼食の形態が実習生に衝撃を与えたり、生徒たちがマスクをしていることで、実習生にとって生徒が判別しにくくなったり、実習生もマスクをしているため、想像以上に声を大きくしなければ、生徒たちに言葉が届かないなどといった点は今年度も同様であるが、実習生たちがそのような状況であっても、何とか生徒たちと交流しようと積極的に行動していたこと、そしてそのような行動を学校側から止められなかった点は、今年度の特徴であるかもしれない。そしてそのような交流が、実習を記憶に残るもの意義深い経験としている点は、2019年度以前と同様であろう。

大学での研究、学習について言えば、対面（面接）授業とオンライン（遠隔）授業との学生にとっての違いが、オンライン授業に対応することに力が注がれていた2020年度よりも明確に記されているし、対面授業とオンライン授業が併存する状況において、いかに自分たちの研究、学習を、以前よりも効率的に、また自律的に進めていくのかということが、学生にとっての大きな課題となってきたことを把握できる。

ところで、COVID-19やワクチン、PCR検査に対する考え方、あるいはどのような産業とかがわりがあるのかなどによって、コロナ禍に対する人々の立場は異なり、その差異が人々のあいだに境界線を引きつつある。そしてその結果、コロナ禍以前にはなかった対立が人々のあいだに生じつつある。

この点については、大学生の生活も例外ではなく、レポートには、彼ら／彼女らの生活においても、コロナ禍が引き金となって対立が生じ、彼ら／彼女らの人間関係が変容したことが記されている。このような新たな対立の惹起は、コロナ禍が与えたネガティブな影響であろう。

一方で、レポートを読むと、長期化するコロナ禍とどうにか折り合いをつけようとして、今回のコロナ禍を自分のこれまでの生活などを省察する契機と捉え、変化する社会のなかでどのように自分の生活を展望しデザインしていけばいいのかを考える学生が増えてきていることを知ることができる。

総じて言えば、コロナ禍が学生たちの教育実習、学生生活、大学生活に与えた影響は非常に大きなものであるが、コロナ禍が長期化するなかで、彼ら／彼女らは徐々にレジリエンス resilience を発揮しつつあると

見ることができるのではないだろうか。

最後に、多忙な時期であるにもかかわらず、またレポートの課題が振り返りたくない出来事を想起させることとなったかもしれないにもかかわらず、コロナ禍における自身の経験を綴ってくれた受講生諸君に対して、そして校正作業にご協力いただいた本学共通教育研究センター森俊二特別任用教授に対して衷心より感謝したい。